

◇ 本編纂会と「尖閣研究」のPRです

1、編纂会を自己紹介させて下さい

わが国が誇るべき 120 年余実効支配の諸偉業

尖閣諸島は、まぎれなく日本の領土、沖縄県の島です。

沖縄県と尖閣諸島との関わりは 120 年余の歴史を有し、その間、古賀氏による開拓、沖縄漁民による漁場開発利用、学術調査団による島の自然・生物相の解明等々が為され、数多くの実効支配の事績が積み上げられてきました。

また、隣の中国は、歴史的に日本領土と認め、自国の地図にも日本の島と明記していました。

ところが 1968 年、国連エカフェが、東シナ海・黄海に、海底石油資源の可能性を発表し、尖閣が石油の島と脚光を浴びたため、態度を豹変しました。

1971 年、突如、尖閣諸島の領有権は中国にあると主張したのです。

中国は、今では武装公船を尖閣海域へ派遣し、領海

侵犯を繰り返し、国際社会に対し、自国領土との外交キャンペーンを図りながら、略奪攻勢を強めつつあります。

だが、中国の最大の弱点は、実効支配を証左するもの何 1 つ示せないことです。もしも、島に上陸し開拓していたなら、それを裏付ける文書一枚すらも、また島を探訪していたのなら、断崖急峻な地形、無数の海鳥が生息、天空を乱舞する様を綴った報告の類一片すらも、もしも伝統的に漁場利用していたのなら、操業していた漁民の証言の 1 つすら、示すことができません。

国際社会に、自国領土と示せる写真 1 枚も持っていないのです。

このようにみえてくると、わが国の実効支配の事績こそが、中国の領有権主張のまやかし打ち砕く最大の武器になるわけです。

わが国は、120 余年に亘るこれらの歴史的諸偉業を、堂々と内外に誇示し、尖閣諸島は日本の島であることを断固として訴えるべきです。



尖閣諸島開拓拠点・魚釣島古賀村の雄姿
国旗日の丸がヘンボンと翻っている。(明治 41 年撮影)

編纂会 微力ながら 諸偉業掘り起こし 情報発信

本ホームページをご覧いただきありがとうございます。

私たち編纂会は、地元沖縄県下に埋もれている尖閣諸島に関する資料を発掘・収集、整理・保存し、情報発信することを目的に、結成された任意団体です。

私たちは、僅か数名からなる零細組織で、10数年前に結成されました。

その間、微力ながらも、わが国の尖閣諸島の歴史的偉業を掘り起こす調査活動を行い、その調査成果を情報発信して、紹介に努めてまいりました。

本ホームページにおいては、調査成果の一部ではありますが、情報発信をして、皆様と一緒に共有していきたくと思っています。

ご愛顧のほど、宜しくお願ひします。

なお、調査成果は、私たちの力不足もあって、決して十分な内容ではありません。皆様のご協力を得て、よりよいものしていきたい所存です。

もしも、内容に疑問やお気づきの点、またはご意見がありましたら、編纂会宛に、メール、またファックで、お知らせ下さい。

どんな小さなことでも構いません、参考にさせて下さい。

今後の内容の充実に努め、調査の励みにしたいと思っております。

宜しくお願ひ申し上げます。

設立 きっかけ 戦後期 空白部分の穴埋め？

私たち編纂会を自己紹介させて下さい。

設立のきっかけ、これまでの調査活動についてです。

今から14,5年前です。尖閣諸島に興味を持ち、勉強したいと思い資料を探してみましたが、当時は尖閣に関する情報はとても少なく、見つけるのは困難な状況でした。インターネットを検索しても多くありませんでした。

たまたま、馬場能久氏と田中邦貴氏のホームページに出会った時は驚きました。三大尖閣ネットと称賛されていたほど断トツで、素晴らしい内容で、目を見張るものでした。(三大ネットについては本ホームページ「文献書庫」に詳述)。

私たち初心者はそうでしょうが、あの当時尖閣に興味を持った人たちは、殆どが、この三大ネットから基本情報を得て、尖閣について勉強していたはずで、よくもあれだけの情報を個人で集めて、紹介発信してくれていることに、ただ感謝し、勉強させてもらっていました。

あれやこれやで、尖閣に関する知識を増えていくうちと、戦後期の部分が少し気になりました。わが国の120年余に及ぶ実効支配が綿々と続いていたにも関わらず、戦後期は情報が少なく、曖昧模糊とした感じでした。

戦前期の諸活動—明治期の古賀氏の開拓、黒岩・宮嶋氏による学術調査等は、公文書や学術誌等からさまざまな情報が得られました。

戦後期になると一転するのです。沖縄側で実施された学術調査を見ると断片的です。尖閣海域における漁業活動に至っては不明のままでした。

しかしながら、地元沖縄においては、尖閣諸島は、海鳥の楽園、生物資源の宝庫として知られ、琉球大学による調査団も組織されて、学術調査も綿々と実施されたこと、また島の周りは糸満、宮古八重山各地から出漁した漁船が操業して賑わいを見せていたことなど、新聞は、尖閣諸島を舞台とした様々な動きを報じていました。



戦後沖縄の尖閣諸島を舞台に、学術調査や漁業活動など様々な動きを報じている新聞。

終戦後の早い時期から、尖閣諸島は「日本漁船はすでに基地化」（自由民報[八重山紙]1952.4.4）と報じ、国内有数の漁場として日本本土から多数の漁船が出漁していたことも分かります。また、「尖閣列島学術調査団帰る」（沖縄タイムズ 52.4.29）の記事を見ると、調査団が、「冬場漁場には最適」として、「同島を基点とする冬期の水産業は・・カジキ、鰹、フカ、イルカなど漁獲、日本、台湾から冷凍船が

進出している点から見た時・・世界的漁場として最も有望で、そのためには同島で給水設備、船溜り場、冬期の無線設備が是非必要である。」と提案するなど、地元沖縄側の動きを報じています。

沖縄県が米軍施政権下にあったため、これらの情報が途切れて、欠落し、戦後に空白部分が生じたのかも知れません。

ならば、地元沖縄に住んでいる人間が、欠落した情報を発掘、収集、調査して空白を埋めなければならないのではと思っていました。

だが、いくら待ってもそんな人は現われませんでした。

とうとう自分たちでやらざるを得なくなりました。

(続く)